

若狭地方における家族呼称の分布とその変遷

加 藤 和 夫

1. はじめに

小論では、福井県若狭地方における言語地理学的調査資料から、特に家族呼称に関する項目を扱い、その分布を考察する。

家族呼称は、親族呼称の下位範疇におかれ、さらに親族呼称は、親族名称などとともに、親族語彙という「語彙の部分体系」を構成していると考えられる。

ある地域社会の地域成員が日常生活に用いる生活語、そして、その集合体である生活語彙というものを考えた時、親族語彙は、生活語彙の中でも、より基本的な部分をなすものであり、その構造（体系）や、それと地域の社会構造、文化構造との関わりを明らかにすることは、これまでも、方言学や社会人類学の重要なテーマのひとつとされてきた。そして、方言学の側から言えば、今後は特に社会言語学（言語社会学）的観点からの研究の進展が期待される。近年刊行された、日本方言研究会・柴田武（1978）や国立国語研究所（1979）などには、明らかにそうした動きが見てとれるのである。

さて、では、ここで取り上げようとする若狭地方に目を転じた場合、その辺の事情はどうであろうか。残念ながら、親族語彙およびそれらに関連する研究・報告等は、皆無に近い状態である。特に、全域を見渡せるものは全くない。筆者が調査にあたって参考とし得たのは、一部の方言集の類に記載された、わずかな親族名称・親族呼称のみであった。

小論で考察の対象とする家族呼称は、それが言語地理学的調査によって得られたものであるという特殊な制約も加わって、親族語彙全体からみれば、ごく一部のものにすぎない。しかし、これまで、目ぼしい研究・報告等の全く見当たらない若狭地方で、たとえその一部についてだけでも、全域の分布が概観できるということは、今後の研究のためにも必要なことであろう。

以下、具体的に言語地図をみながら、若狭地方における家族呼称の分布を考察する。

2. 若狭地方における家族呼称の分布と変遷

筆者が今回調査できたのは、次の6つの家族呼称についてである。

(1) 父親の呼称

(2) 母親の呼称

(3) 祖父の呼称

(4) 祖母の呼称

(5) 兄の呼称

(6) 姉の呼称

そして、これらのほかに、関連項目として、次の4項目を調査した。

(7) 他家の中年男性の呼称

(8) 他家の中年女性の呼称

(9) 本家

(10) 分家

小論では、以上のうち、「父親の呼称」（以後〈父親〉と略記する）と「母親の呼称」（以後〈母親〉と略記する）を中心に論を進め、あわせて他の家族呼称についても考察する。

ところで、筆者の行なったような言語地理学的調査では、そこで得られた家族呼称の分布を考察するにあたっての、ひとつの限界とも言えるものがある。具体的な分析に入る前に、その点について触れておく必要があると思われる。

筆者を含めて、一般の言語地理学的調査では、1地点でひとりの話者を選び、その話者の回答をその地点の代表として、地図を描いている。しかし、こうした方法はあくまでも、同じ集落の言語は条件さえ一定なら、誰の言語もほぼ均質であるという仮説に基づいて行なわれている。この条件というのが時として問題となる。確かに、動植物の名称であるとか、一般的事物の名称などに関しては、この仮説も、ある程度の高い妥当性を有すると考えられる。ところが、家族呼称などでは、次のような事情があった場合、上の仮説は成り立たなくなり、従って、あるひとりの話者の答えを、その地点の代表とはできなくなることがある。

例えば、昨年から調査の機会を与えられている石川県能美郡辰口町では、以前に、〈父親〉と〈母親〉に関して、家の家格による2段階の使い分けがあったことが確認されている。つまり、かつての辰口町では、家格の高い家庭では、父親をトート、母親をカーカと呼び、家格の低い家庭では、父親をマーマ、母親をヤーヤと呼んでいたことがわかったのである。

辰口町の家族（父・母）呼称

上 家 格 ↓	辰口町の家族（父・母）呼称	
	〈父親〉	〈母親〉
	トート	カーカ
	マーマ	ヤーヤ

この種の事例は、辰口町に限らず、全国いたるところで見られるものだろうし、実際にそうした報告も過去にあるが、この様な辰口町の例ひとつをとってみても、家族呼称を含む親族呼称、あるいは親族名称等は、話者の位相、例えば、育った家が集落内で占める社会的地位（家格）などを反映して決まる場合があり、そこに、1地点をひとりの話者で代表させる言語地理学的調査の限界がある。

辰口町の地点Aの話者が〈父親〉にトートと答え、隣接する地点Bの話者がマーマと答えたとすると、地点Aでマーマ、地点Bでトートという呼称が存在しないのではなく、事実は、地点Aの話者は家格の高い家庭に育ったのでトートと呼び、地点Bの話者は家格のそう高くない家庭に育ったのでマーマと呼んだということなのである。すなわち、地点Aでも、家格の高い家では〈父親〉マーマが用いられ、地点Bでも、家格の高い家ではトートが用いられていた。それがたまたま、地点Aと地点Bの話者の間に家格の違いがあったため、異なった呼称が答えられたというふうに考えられる訳である。

以上のような事情から、筆者が扱う資料も、その等質性という点で、不十分の謗りをまぬがれないものかもしれない。しかし、小論では敢えて、家族呼称を答えてくれた110余名の話者達が、ほぼ位相的に均一（中流一般家庭）であるとの仮定のもとに考察を進めることにする。

2.1 父親の呼称

〈父親〉は、小論末尾に付した言語地図、図2と図3にその分布を示した。

ところで、〈父親〉では、〈母親〉とともに、いわゆる分布解釈の補助手段（情報）とする目的で、話者の成長過程における呼称の変遷を、20歳を一往の目安として尋ねてみることにした。各々の項目に2枚ずつの言語地図があるのは、そのためである。例えば、〈父親（成人前）〉の図2には、話者が子供の頃父親をどう呼んでいたかということで得られた答えを載せ、〈父親（成人後）〉の図3には、成人後父親の呼び方が変わった

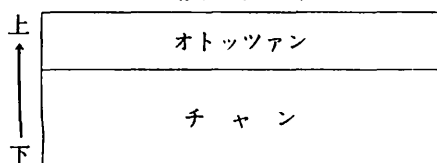
たかどうかで、変わらなければ図2と同じ呼称、変わったならばその呼称を載せてある。ただし、これらは、話者の記憶だけを頼りとした情報であり、その情報が、本当に正しい事実を述べているかどうかについて、解釈する者は、あくまで慎重でなければならない。

さて、図2の分布からはまず、若狭地方における〈父親〉の代表形が、チャンとオトツツァンであることがわかる。これらの呼称の分布は、整然とした分布とは言い難いものであるが、先に言及した、話者の位相などとの関わりを考慮すると、当然の結果とも言えるものであろう。然るに、そうした事情を考えに入れても、チャンとオトツツァンの分布からは、次のような解釈が成り立つと思われる。

巨視的に分布を眺めると、チャンがオトツツァンよりも周辺に分布する、いわゆる周囲分布であり、方言圏論を適用して、チャンの方がオトツツァンよりも古いと解釈できる。このことは、両形を答えた、三方町倉見（6513.0652）、同町食見（6503.6338）、上中町三生野（6503.8478）、同町市場（6513.2464）、小浜市深野（6512.4766）、名田庄村森町（6512.6423）、大飯町山田（6512.2542）等の話者達の、新古に関する内省報告が、全てチャン→オトツツァン（矢印の左が歴史的に古く右が新しい）で一致していることから裏付けられる。さらに、この解釈は、図2と図3を比較して、図3でチャンの分布が大幅に減少し、それに代わってオトツツァンが勢力を伸ばしていることから支持される。また、名田庄村小倉（6512.6609）の話者は、「自分は父親をチャンと呼んだけれど、息子は父親をオトツツァンと呼んでいる」とも説明している。

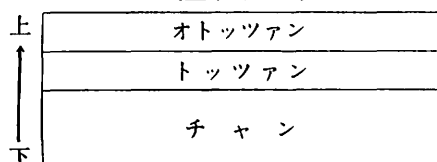
以上から、〈父親〉チャンとオトツツァンに関しては、通時的にチャン→オトツツァンという変遷が跡付けられた。ところが、これによって単純に、若狭地方のA集落の全ての家庭で、かつて父親をチャンと呼んでいたのが、ある時期オトツツァンに変わったというふうには説明できない。なぜなら、既に繰り返し説明しているように、親族呼称（家族呼称）などでは、例えば、あるひとつの集落に〈父親〉が数種併存している場合を考えなければならないからである。美浜町竹波（5593.8952）の話者は、「自分はチャンと言ったが、上品な言い方をする家ではオトツツァンとも呼んでいた」というような説明をしている。また、その逆に、「自分はオトツツァンと言ったけれども、チャンと呼んでいる友達もいた」と説明する話者もいた。つまり、これらの地点では、2通りの呼称が併存していたことになる。美浜町竹波の状況を図示すれば、次のようになる。

〔美浜町竹波〕

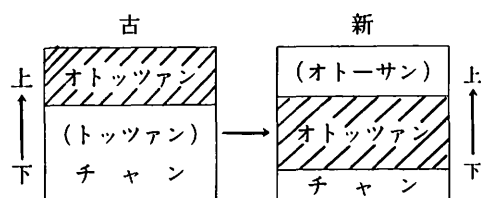


それに対し、チャン、オトツツアンとともに、トツツアンがいくらかまとまった分布をみせる上中町三田(6503.9560)の話者は、「自分はチャンと言ったが、トツツアンという家もあったし、もっと丁寧な家ではオトツツアンとも言っていた」と説明しており、ここでは、3通りの呼称が併存していたことがわかる。これは、次のように図示できるだろう。

〔上中町三田〕



さて、美浜町竹波と上中町三田について示した2つの図を見る限りにおいては、オトツツアンもチャンも(そしてトツツアンも)、同じ時期に同じ集落の中で用いられていた呼称ということになり、両者の新古関係はわかる筈もない。ところが、既述のとおり、図2と図3の分布および話者の説明からは、明らかにチャンからオトツツアンへの変遷が跡付けられる。このことは一体どういう事実を明らかにするのだろうか。図でそのことをわかりやすく示すことにしよう。



若狭地方における〈父親〉の変遷

つまり、上の図からわかる様に、チャン→オトツツアンへの変化というのは、上流家庭(俗にいうい家)を除いた中流一般家庭での、〈父親〉に関する変化なのである。古くは上流家庭で用いられていたオトツツアンが、時を経て中流一般家庭での呼称に変わるのは、つまりは、〈父親〉オトツツアンのもつ待遇価値が下降したということ、それはあたかも、敬語形式における待遇価値の下降にも似ている。

では、若狭地方の中流一般家庭におけるチャン→オトツツアンという〈父親〉の歴史は、そのまま国語史

における〈父親〉の歴史を反映しているだろうか。若狭地方が、かつての中央語地域京都をすぐ南に控えているだけに、興味あるところである。

一往の目安として『日本国語大辞典』(小学館)をあたってみると、「ちゃん」の説明に、「父。江戸時代から明治初期にかけて庶民社会で用いられた。」(下線筆者)とある。他方、「おとつあん(おとっさん)」には、「父を敬い親しんで呼ぶ語。近世末期、江戸で中流以上の用語。『おとうさん』が一般化する前に最も広く用いられた呼び方。」(下線筆者)との説明がある。

また、前田勇編『近世上方語辞典』(東京堂)を見ると、「おとつあん」に、「中流以上の用語。中流以下は「ととさん」。嘉永頃(筆者注:1848—1854)には、かなり一般化した。」(下線筆者)とある。「ちゃん」は項目として載っていない。

これら2つの辞書で見る限り、両者は、使用階層の違いこそあれ、ほぼ同時期(19世紀初頭)に使われ始めたもののようである。ただし、『日本国語大辞典』で、それぞれの初出文献(刊行年)を比較すると、「ちゃん」が洒落本・聖遊廊(1757刊)、「おとつあん」が滑稽本・浮世風呂(1809—13刊)となっている。

となると、若狭地方の中流一般家庭では、まず、本来庶民社会の呼称であった「ちゃん」が使用され、後にやや上の階層での呼称「おとつあん」へと変わっていったと考えられる。

松崎強造(1975)には、父親を意味する語として、オトツツアン、チャン、トツツアンの3つが載り、テテ、トトを除いて、図2、図3中の大飯郡の分布と一致する。また、福井県福井師範学校(1975)には、敦賀郡(現敦賀市)、三方郡、遠敷郡、大飯郡にチャンが分布するとある。これらから、昭和初期の若狭地方には、ほぼ全域にわたる広い範囲で、チャンが分布していたことがわかる。

オトツツアンの分布域の中で、東の上中町と西の大飯町、名田庄村に分布するトツツアンは、図2でこそわずかな分布だが、かつてはもっと広く分布したものであろう。既に触れた上中町三田の話者の説明のように、本来、オトツツアンより下、チャンより上の待遇価値を有し、中間的位相の家庭で用いられたものであろう。それが、社会構造の単純化にともなって次第に使われなくなったものと思われる。

オツツアン、オツチャンは、図2で3地点に分布がみえる。これらは、いずれも「他家の中年男性の呼称」(以後〈中年男性〉と略記する)として、図10で若狭の中西部に分布のみえるものと形が一致する。このうち、

三方町^{ミヅタ}神子 (6503.2386) のオツチャンの場合、〈中年男性〉に対してもオツチャンを答えているので、いずれかの答えが疑われる。一方、オツツァンの分布する三方町^{ミヅタ}北前川 (6503.7645) と上中町^{カミナカ}河内 (6513.4582) の場合、〈中年男性〉に対して、北前川の話者がオンサン、河内の話者がオジを答え、〈父親〉と区別している。よって、オツツァンはオトツツァンから変化した音訛形である可能性が高い。

このほか、図2、3で分布する呼称のうち目を引くのは、西の大飯郡に分布するトトとテテである。図2、3では2地点にしか分布しないが、それ以外にも高浜町^{タカハマ}車持 (6512.1348)、同町^{タカハマ}立石 (6512.0187)、同町^{タカハマ}子生 (6512.2106) の話者から理解語としてのトンを聞いている。話者達の親が使っていたということなので、古くは、大飯郡(大飯町・高浜町)に広くトト、テテ、あるいはトトンといった呼称が分布していたと考えられる。特に、チャンの分布がみえない高浜町では、トトンがチャンに代わる呼称として用いられたのかもしれない。トンはトトの音訛形であろう。

福井県関係の方言文献では、福田太郎(1902)と若越方言研究会(1969)に、父の意の「とと」が載っているが、残念ながらその使用地域は示されていない。

文献国語史の上ではというと、「とと」も「てて」も、「ちゃん」などと比べてはるかに古い時代から現われるようである。『日本国語大辞典』によれば、「とと」は、散木奇歌集(12世紀前半)や日葡辞書(1604)などにみえ、「てて」は、宇津保物語(10世紀後半)や更級日記(11世紀中頃)などにすでにみえている。また、「父親」の方言としての「とと」の分布も、北は青森から南は鹿児島までの広範囲にわたり、しかも、かなり辺境の地にまで及んでいる。大飯郡に分布するトト、テテも、おそらくはチャン、オトツツァンより以前に分布していた古い呼称の名残と考えられる。

2.2 母親の呼称

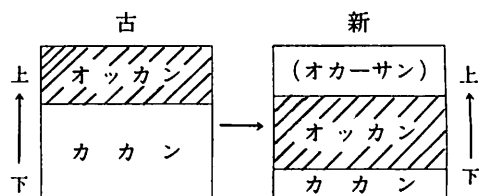
〈母親〉の分布は図4と図5に示した。

まず図4を見ることにしよう。図4では、〈父親〉の図2におけるチャンの分布にほぼ対応する形で、カカンに代表されるカカン類(カカ、カカン、カカー、カー、カカサ)が分布している。また同様に、オトツツァンの分布に対応する形で、オカンあるいはオッカンに代表されるオッカン類(オカー、オカン、オッカン、オッカー)が分布している。すなわち、巨視的に見れば、オッカン類の周囲にカカン類が分布する周囲分布である。さらに、図4と図5を比較すると、これまた〈父

親〉と同様、図5でカカン類の分布が減少、代わってオッカン類が増加している。そして、両形を答えた話者の、新古に関する内省も、全てオッカン類よりカカン類が古いことで一致している。

以上のことから、〈母親〉の分布にも、〈父親〉の場合と同様の解釈が成り立つ。つまり、若狭地方の中流一般家庭においては、〈母親〉に古くはカカン類が用いられ、その後新しくオッカン類が用いられるようになったとの解釈である。小浜市^{コハマ}須縄 (6512.2986) の話者の説明によれば、話者自身は母親をカカンと呼んだが、その子供達はオッカンと呼んでいるとのことであった。

また、話者の位相などとの関わりを考えれば、〈母親〉でも〈父親〉の場合と同じ様な歴史を推定できる。それは次の様に図示できるだろう。

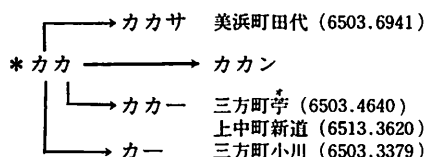


若狭地方における〈母親〉の変遷

カカン類に代わって、中流一般家庭で新しく用いられ始めたオッカン類は、その時点で新しく伝播したものではない。もともと、カカン類とともに、より上の位相の家庭で用いられていたものが、時がたつにつれて次第にその価値を下降させ、一般家庭で用いられるようになったと予想される。上の図はそういう歴史を表わしている。

ではここで、これまでカカン類、オッカン類のように類としてまとめて述べてきたものについて、少し詳しくみることにしたい。

カカン類にまとめたものは、図4の凡例中、カカ、カカン、カカー、カー、そしてカカサの5つの呼称である。これら5つの呼称の通時的先後関係を分布に探ると、中で最も周辺部に分布するカカが古い形と解釈できる。この類で最も広い分布域をもつカカンは、カカが音変化—語末に撥音を付加—して生まれた呼称であろう。5つの呼称の先後関係をまとめて示せば次のようになる。

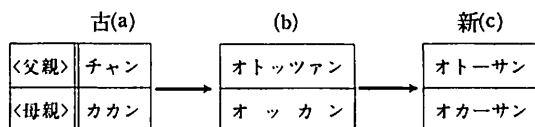


一方、オッカソ類にまとめたものは、オカー、オカン、オッカソ、オッカーの4つの呼称である。オカーとオッカーが中でも周辺部に分布し、オカン、オッカソより古い呼称であるらしいことがわかる。さらに、オカーとオッカーの新古については、オカンとオッカソの分布とも考えあわせて、促音化したオッカーの方が新しいと解釈する。なぜなら、若狭地方では、オカンとオッカソのように東西対立型の分布パターンを示す場合、東に分布するものの方が一般的に古い場合が多いためである。⁽⁷⁾すなわち、オカンとオッカソについても、オッカソの方が新しいと解釈できる。以上から、オッカソ類の4つの呼称の先後関係は、次のように推定できる。

*オカー → オカン → オッカソ
 └→ オッカー

図4、図5では、大飯郡にオカソの分布が確認できないが、松崎強造(1975)によれば、かつて昭和の初期には、大飯郡でもオッカソ、カカンとともにオカソの使用されていたことがわかる。このことは、若狭地方中西部に分布するオッカソがオカソを経て生じたとする、上図の推定にとってのひとつの傍証となるにちがいない。また、同書には、カカンに対して卑語との説明がある。これは、既に昭和初期の大飯郡の中流一般家庭で、カカンからオッカソ(オカン)への交替が、進行していたことを物語るものではないかと考えられる。⁽⁸⁾

ところで、前にも触れたように、〈父親〉と〈母親〉の分布に関しては、〈父親〉チャンの分布域に対応する形で、〈母親〉カカンがほぼパラレルにあらわれ、同様に、オトツツァソの分布域に対応してオッカソ、オカン、オッカーがあらわれている。そして後述する「祖父の呼称」(以後〈祖父〉と略記する)、「祖母の呼称」(〈祖母〉と略記する)、「兄の呼称」(〈兄〉と略記)、「姉の呼称」(〈姉〉と略記)のうち、〈兄〉を除いた3項目の地図(図6、7、9を参照のこと)もまた、〈父親〉〈母親〉とパラレルな分布状況を示している。⁽⁹⁾これはどういうことかと考えると、この地方では、〈父親〉〈母親〉〈祖父〉〈祖母〉〈姉〉の5つの家族呼称が、語彙の部分体系として互いに緊密に関わりながら、平行的に変化してきたということなのである。〈父親〉と〈母親〉に限って、そのことをわかりやすく示せば次のようになる。ただし、これは中流一般家庭での呼称を想定してのものである。



2.3 祖父、祖母、兄、姉の呼称

〈祖父〉〈祖母〉〈兄〉〈姉〉の分布は、それぞれ図6、7、8、9に示した。これら4つの家族呼称については、既に述べたこととの重複を避け、解釈の要点のみを記すことにする。

2.3.1 祖父の呼称

図6を見ながらその分布を考察する。

分布は、大きくジャン類(ジャン、ジャ、ジャン、ジサン、ジサ、ジーサン、ジー、ジジ、ジジー、ジチャン、ジーチャン、ジンチャン)とオジャン類(オジャン、オッジャン、オンジャン、オジー)、そしてオジーサン類(オジーサン、オジサン、オジーチャン、オジチャン)の3つの勢力にまとめられると思うが、その分布域から推して、〈父親〉や〈母親〉の場合と同様、ジャン類が最も古い呼称であると解釈する。変化は、まずジャンからオジャン(オッジャン)への交替が進行し、さらに新しくオジーサンが分布し始める、という流れで起きているとみられる。

ジャ、ジャンはジャンからの音訛形、ジーはその下略形、そしてジジ、ジジーもまたジャンからの派生形とみてよいであろう。

ジサン、ジサ、ジーサン、ジチャン、ジーチャン、ジンチャンは、ジャンからの変化、あるいは、ジャンが、新しい呼称であるオジーサン、オジーチャンとの間にコンタミネーションを起こしたものであろう。

オッジャン、オンジャン、オジーなどは、オジャンの音訛形と考えられるが、図6では、特に若狭東部で促音化したオッジャンの分布が目立つ。

2.3.2 祖母の呼称

ここでは〈祖母〉の分布を図7でみる。

図6と図7を比較してわかるように、両者は、ほぼ一致した分布パターンを示す。そしてこれは、前述のとおり、〈父親〉〈母親〉の分布とも非常に近い姿を示している。

図6、図7を比較すると、〈祖父〉のジャン類の分布に対応してババン類(ババン、バサン、バサ、バーサン、バー、ババ、ババー、バーチャン、バン、バンチャン)が分布し、オジャン類とオジーサン類の分布

に対応してオバン類（オバン，オバー）とオバーサン類（オバーサン，オバサン，オバーチャン）が分布している。やや異なる点は，〈祖父〉のオジーサン類に比べオバーサン類の分布が少ないことである。最も新しい呼称と思われるオバーサン類は，オジーサン類ほどにはまだこの地方に入り込んでいない，つまり，それだけオジャン類に比べオバン類の分布が根強いことを示している。

以上から，〈祖母〉の歴史については〈祖父〉同様に，ババン類が古く，次にオバン類，そしてオバーサン類が最も新しいと解釈される。もっとも，これも中流一般家庭での歴史の推定であって，ババン類とともに，実は上流の家庭ではオバン類が使用されていた可能性が高い。これは，〈祖父〉のジャン類とオジャン類についても言えることで，その辺の事情は，〈父親〉〈母親〉の場合と同じ様に考えるべきであろう。

2.3.3 兄の呼称

図8が若狭地方における〈兄〉の分布である。

図8では，おおよそ上中町と三方町の境界線あたりを境として，東にアンニヤ，西にアンニャンが分布している。その形態の特徴，および当地方における分布傾向から判断して，アンニヤの方がアンニャンよりも古い分布と解釈できる。かつては全域アンニヤの領地であったが，新しく小浜を中心にアンニヤから変化したアンニャンが勢力を上げ始め，東部の美浜町と三方町の一部を除いて，アンニャンに領地を明け渡ししてしまった状態と考えられる。

2.3.4 姉の呼称

図9で見る〈姉〉の分布も，これまで見てきた家族呼称のうちの〈父親〉〈母親〉〈祖父〉〈祖母〉に似た分布状況を示す。先の4つの家族呼称の分布は，ともに似かよった，一種の周囲分布と言えるものであったが，図9に見るネー類（ネー，ネーヤン）とアネー類（アネー，アネ，オネー，アネヤン）の分布は，それらとはやや異なった，しかし典型的な周囲分布である。従って，ここでも方言圏論的に解釈して，ネー類→アネー類という歴史が再構される。そしてさらに，新しい呼称ネーサン（ネーチャン）が分布を上げようとしている。

ネーヤンは，ネーの分布域の中，若狭の東と西で独自に生まれたものであろう。特に西の大飯郡では，ネーに代わってネーヤンがかなり勢力を伸ばし始めている。一方，アネー類では，アネーがもともとととての形と考えら

れ，他のアネ，オネー，アネヤンは，いずれもアネーから変化したものであろう。

2.4 まとめ

以上で，今回の調査で取り上げた6つの家族呼称すべてについて考察した。その地域の社会構造などと密接な関わりをもつ家族呼称については，使用階層との関連などから，そう単純には示せないであろうが，これまで述べてきたところを整理する意味で，ひとつの目安を若狭地方の中流一般家庭において，家族呼称の変遷をまとめて示しておく。

	古(a)	(b)	新(c)
〈父親〉	チャン	→ オトツツァン	-----→ オトーサン
〈母親〉	カカ	→ オカン	-----→ オカーサン
〈祖父〉	ジャン	→ オジャン	-----→ オジーサン
〈祖母〉	ババン	→ オバン	-----→ オバーサン
〈兄〉	アンニヤ	→ アンニャン	-----→ ニーサン
〈姉〉	ネー	→ アネー	-----→ ネーサン

いずれも，多くの音訛形の類は省略し，(a)，(b)それぞれの段階には，中で最も古い呼称と解釈されるものを挙げてある。今，あらためて若狭地方の若年層を調査すれば，おそらく大部分が(c)の段階に近づいていることが確認できるだろう。因に，(a)から(b)への変化の時期は，図2と図3，および図4と図5の比較，そして話者から得られた情報などから，小浜市の東，上中町の中心部付近で，明治末期，今から70年程前と予想される。

なお，小論末尾には，家族呼称に関連するものとして，〈中年男性〉と「他家の中年女性の呼称」（以後〈中年女性〉と略記する）の分布図（図10，図11）を付したので参照されたい。図10では，オンサン類（オンサン，オンチャン，オンニャン，オンヤン）とオツツァン類（オツツァン，オツチャン，オツサン）が，東西対立型の分布を示し，オンサン類→オツツァン類という歴史が推定できる。また，図11については，アバン類（アバン，アバー，アバチャン）→オバサン類（オバサン，オバチャン，オバヤン，オバハン）と解釈する。しかし，いずれにしてもこの2つに関しては，今後，親族名称あるいは親族呼称としての「おじ（伯父・叔父）」「おば（伯母・叔母）」の実態を明らかにして，それらとの比較考察が必要である。

3. おわりに

以上、言語地理学的調査で得られた資料に基づいて、若狭地方における家族呼称の分布とその変遷について考察してきた。

「はじめに」のところでも述べたような様々な制約から、若狭地方の家族呼称の実態と歴史を、十分に明らかにできたとは考えていない。しかしそれでも、8枚の言語地図は解釈する者に実に多くのことを語りかけてくれ、筆者はそれを頼りに、できるだけ巨視的に、かつ大胆な解釈を試みたつもりである。そして、ここで明らかにした通時的変遷の跡や、それらと関連する事実は、大筋では真実であるに違いない。

今後は、小論で述べた内容を検証する意味でも、この地方における親族語彙の体系や、それらと社会構造との関係を明らかにするための調査・研究が望まれる。

注記

- (1) 調査は、1976年から1978年にかけて若狭地方全域(若狭地方に接する滋賀県と京都府の一部も含む)で実施した。調査地点数は延べ240。9地点を除き全て筆者が臨地調査した。小論で扱う資料は、1978年に行なった109地点の調査に基づくものである。調査および調査地域の概略等については、拙稿(1978)(1980a)、また、調査地点名、話者の年齢・性別等については、拙稿(1981)その他を参照されたい。
- (2) 親族名称とは、話し手が第三者に対し、ある親族をさして「この人はわたしの〇〇です」と説明する時の〇〇にあたる、例えば、「この人はわたしのアネ(姉)です」と言う時のアネに相当する言語形式である。これに対し、話し手が親族に向かい、相手に直接呼びかけたり話しかけたりする時に用いる言語形式が、親族呼称である。前者が、いわゆる reference term、後者が address term にあたるものである。
- (3) 馬瀬良雄(1969) 218頁参照。
- (4) ここでいう「家格」とは、かなり抽象的な概念であり、辰口町において家格を決める基準が何であったか、そもそもそういう基準があったかどうか、その辺のところは未だ不明である。
- (5) これまでにわかった範囲では、地域により、ママがマー、ヤーヤがヤー、トートがツーツ、あるいはトー、ツーで実現することがある。また、稀に3段階の使い分けを報告する話者もいるので、古くは3段階あったとも考えられる。
- (6) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』

(670頁)には次の様にある。

Toto. トト(とと)父。これは子どもの使う語である。

(7) 拙稿(1980a)参照。

(8) 堀井令以知(1973)によれば、戦前の京都上加茂では、父と母の呼称に3通りの身分差が認められたという。 <父親> <母親>

上流階級 トサン —— カサン

普通農家 チャン —— カカ

下層農家 トト —— カカ

それが、戦後には中・下層ともチャン・カカになったという。大飯郡をはじめとする若狭地方の一部で、かなり早くから使われなくなろうとしていたチャン・カカ(ン)が、京都上加茂では、意外にも戦後まで用いられていたことがわかる。中央が地方に比べ必ずしも革新的ではないことを示す例と言えよう。

(9) 筆者と同じく、言語地理学的調査において親族呼称を扱っている馬瀬良雄(1980)の286—293頁、図11.37—44(父、母、祖父、祖母の呼称)の分布図でも同様の現象が見られる。

(10) アネヤンの分布する三方町成出(6503.6561)や同町食見からそう遠くない三方町黒田(6503.8585)の話者は、実の姉に対してはアネーと呼び、義理の姉に対してはアネヤンと呼ぶと、両者を区別して答えている。

参考文献

- 加藤和夫(1978)「京都周辺地域にみる語の分布パターン—福井県若狭地方の調査から—」(『日本方言研究会第26回発表原稿集』11—19頁)
- (1980a)「福井県若狭地方における言語分布相—主に語の伝播の観点から—」(『都大論究』第17号 (1)—(24)頁 東京都立大学国語国文学会)
- (1980b)「詞章を対象とした言語地理学—若狭地方の「螢とり歌」の場合—」(『遠管記念論集国語学』 549—572頁 桜楓社)
- (1981)「囲炉裏の座名体系の分布と変遷—若狭地方の囲炉裏をめぐる語彙—」(『都大論究』第18号 (14)—(41)頁)
- (1982)「周圏分布と方言周圏論—分布に探る「つらら」方言の音韻変化過程—」(『福井大学国語国文学』第23号 (9)—(24)頁 福井大学国語国文学会)
- (近刊予定)「福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布」(『人文学報』東京都立大学人文学部)
- 国立国語研究所(1979)「各地方言親族語彙の言語社

会学的研究(1)』 国立国語研究所報告64 秀英出版
(執筆：渡辺友左)

若越方言研究会 (1969) 『新編若越方言集』 品川書店
土井忠生・森田武・長南実 (1980) 『邦訳日葡辞書』
岩波書店

日本方言研究会・柴田武 (1978) 『日本方言の語彙—
親族名称・その他—』 三省堂

福井県福井師範学校 (1975) 『福井県方言集』 国書刊
行会〔原本昭6 (1931)〕

福田太郎 (1902) 『若越方言集全』 品川書店

堀井令以知 (1973) 『京都方言の諸相』 (『愛知大総合
郷土研究紀要』18)

馬瀬良雄 (1969) 「言語地理学」 (『方言研究のすべて』
189—220頁 至文堂)

—— (1980) 『上伊那の方言』 (『上伊那郡誌』第
五巻民俗篇下別刷 上伊那誌刊行会)

松崎強造 (1975) 『福井県大飯郡方言の研究』 国書刊
行会〔原本昭8 (1933)〕

【付記】 小論は、1979 (昭54) 年1月に東京都立大
学に提出した修士論文の一部に加筆・訂正したもの
である。

(1982. 7. 22 稿了)

東京都立大学助手

図1 調査地点

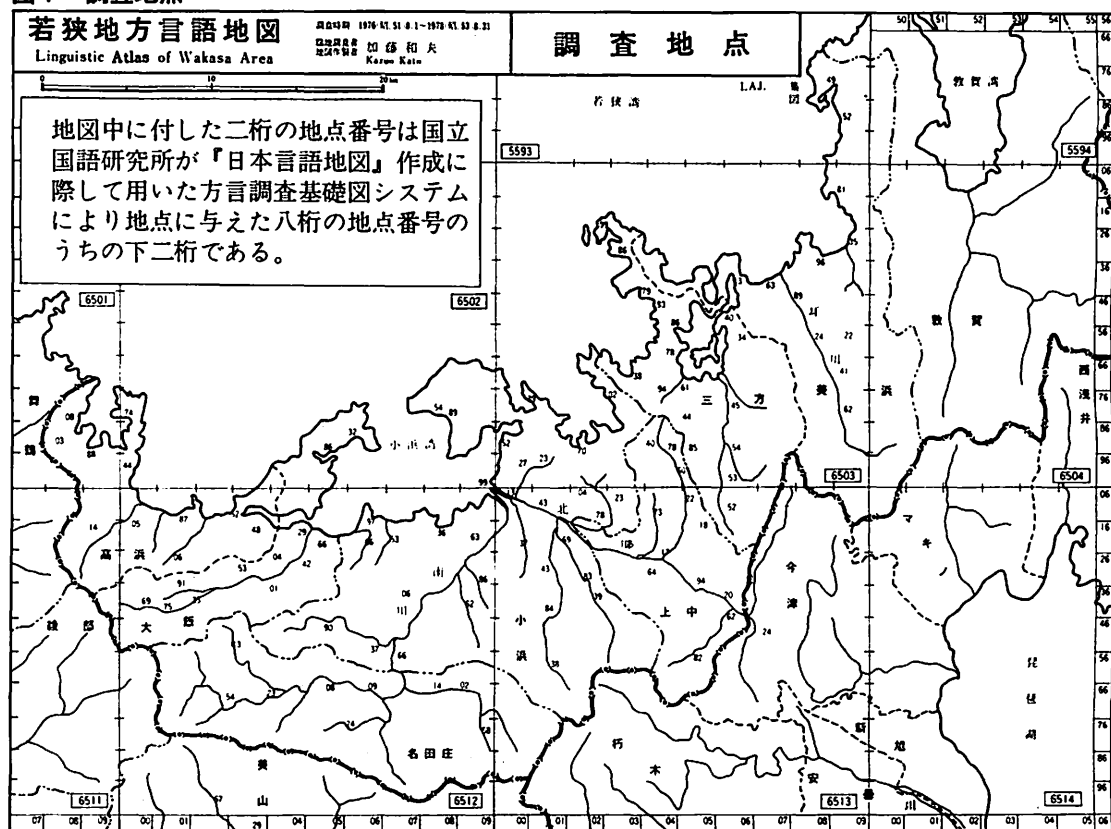


図2 父親の呼称（成人前）

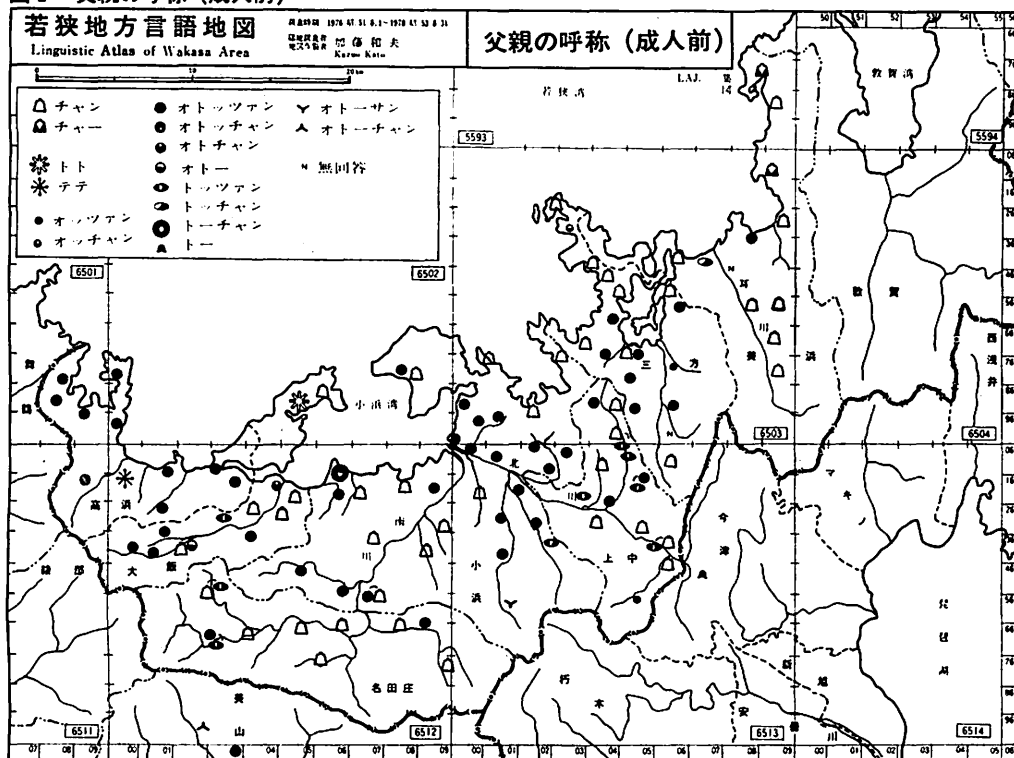


図3 父親の呼称（成人後）

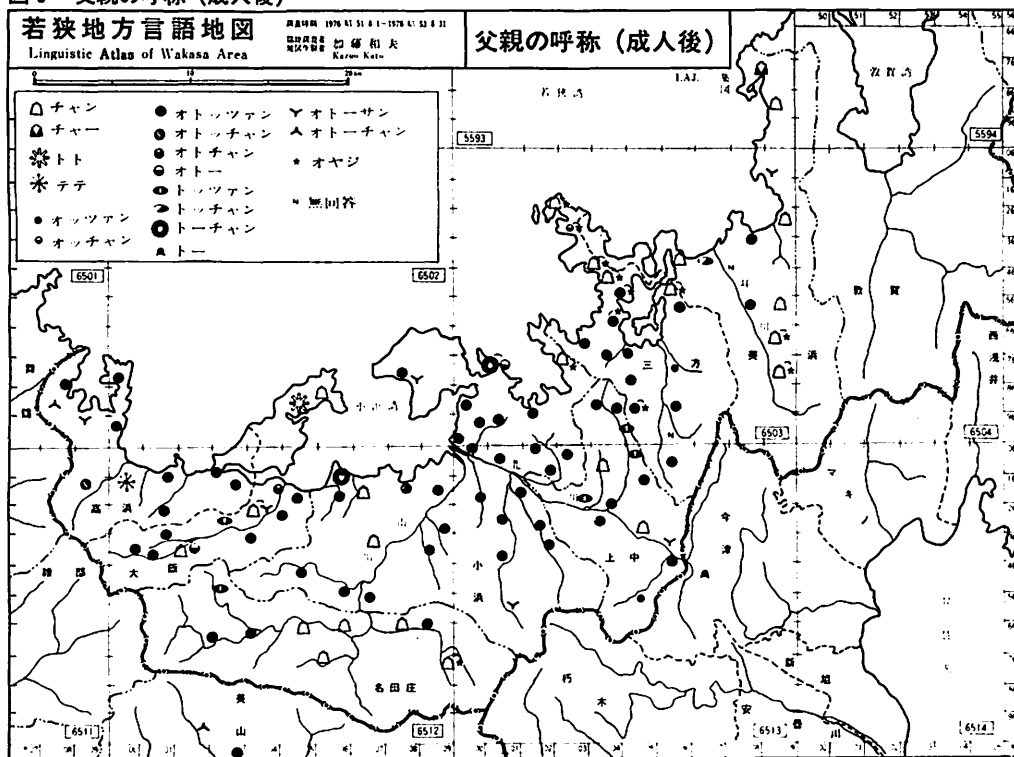


図4 母親の呼称 (成人前)

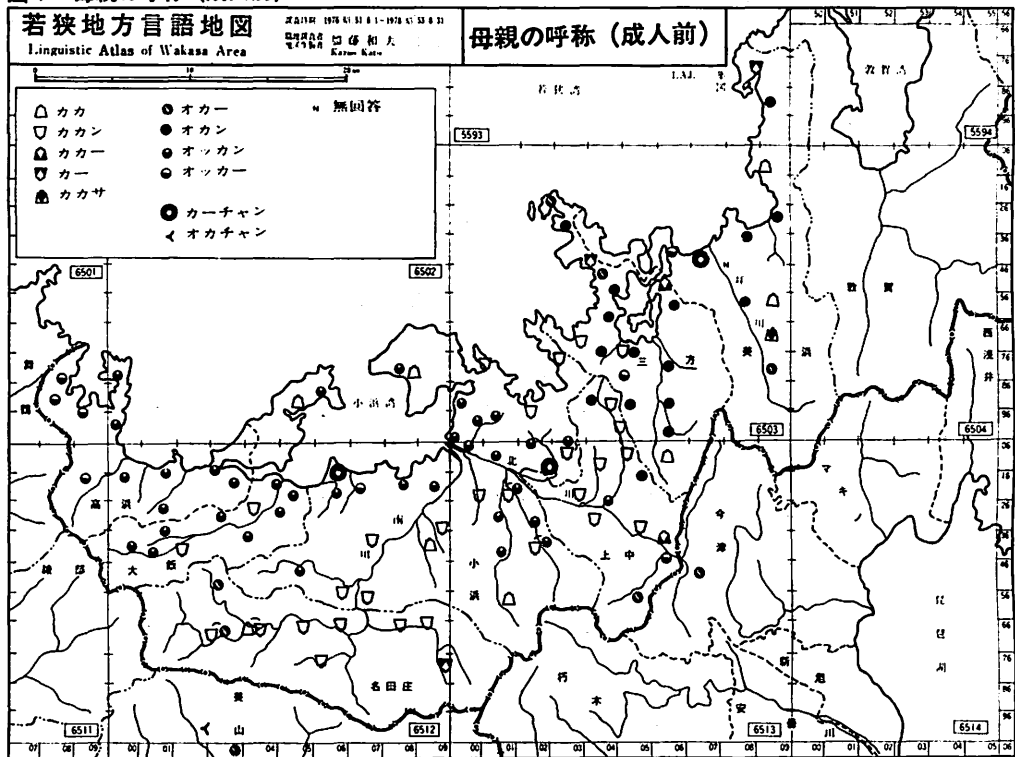


図5 母親の呼称 (成人後)

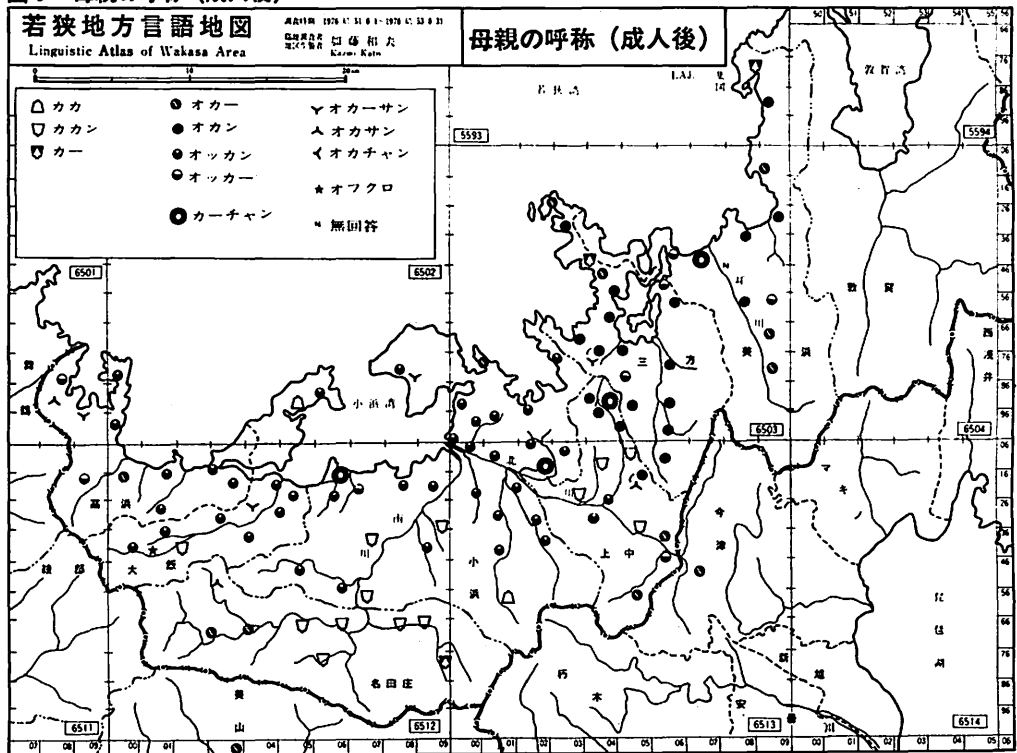


図6 祖父の呼称

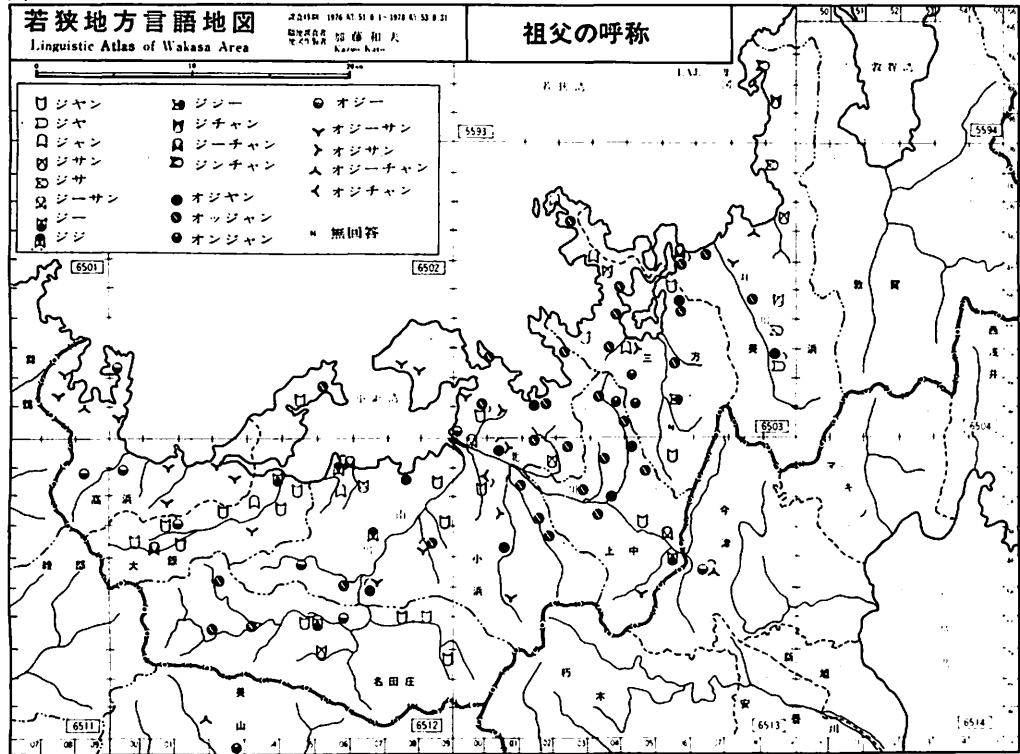


図7 祖母の呼称

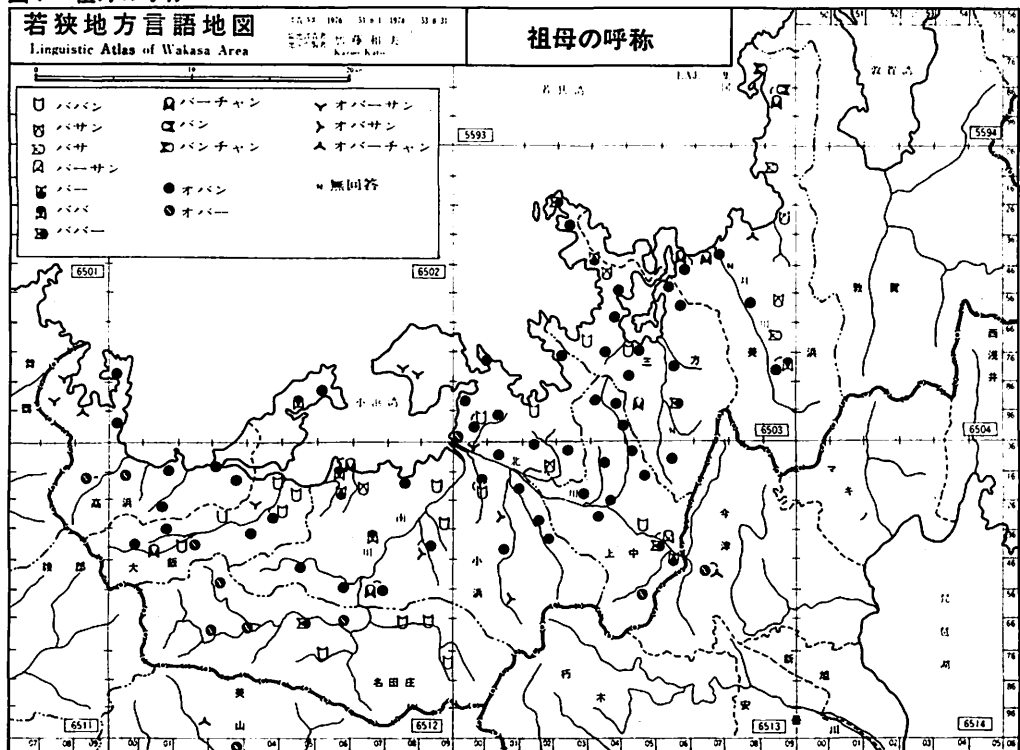


図8 兄の呼称

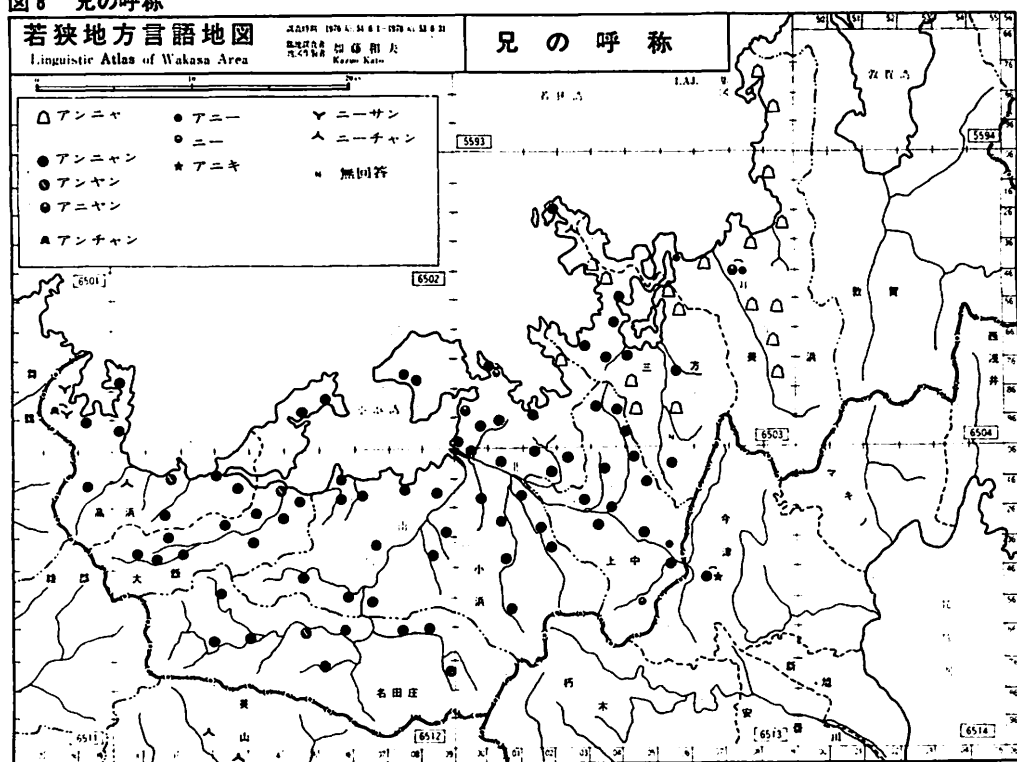


図9 姉の呼称

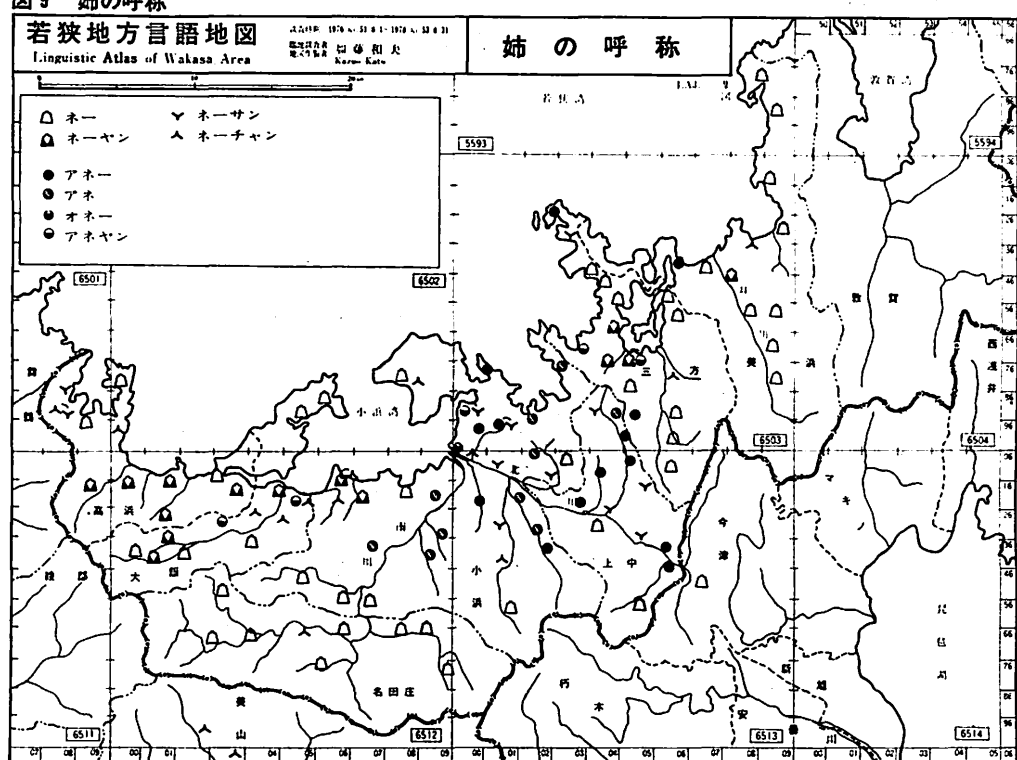


図10 他家の中年男性の呼称

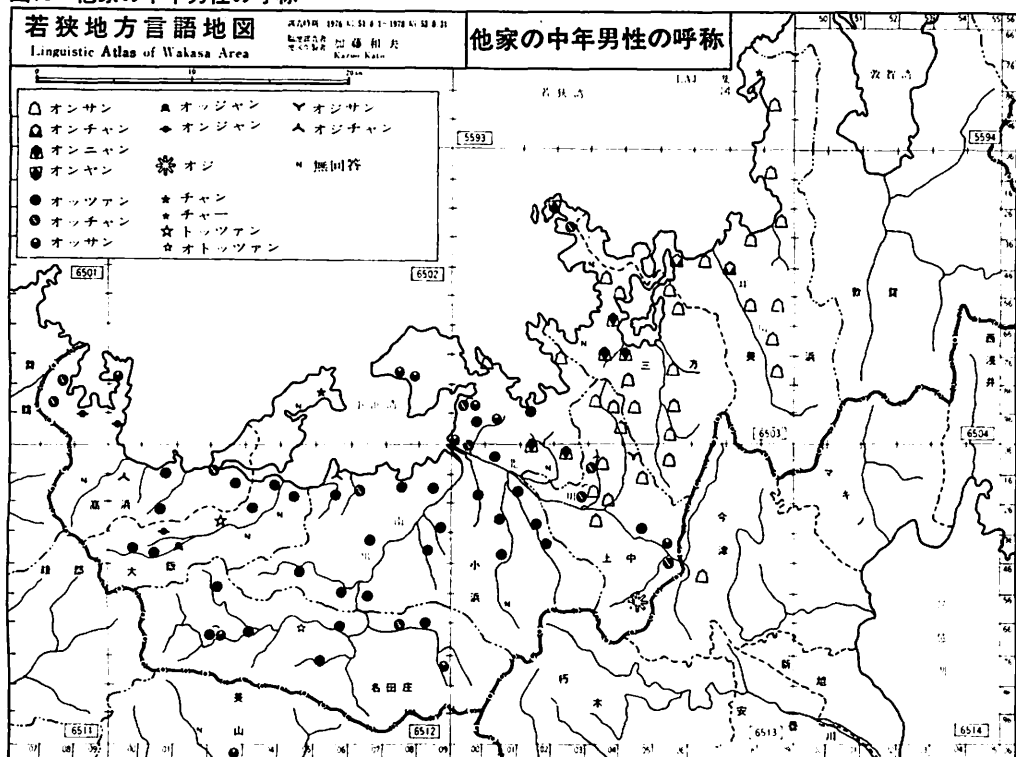


図11 他家の中年女性の呼称

